

- 令和2年度(第70回)秋田県自作視聴覚教材交流発表会
 □ 調査研究の考察の概要 □ 「日進月歩」山王中学校
 □ 2021新年スナップ □ 知恵の輪講座V 暮らしの教室

秋田県生涯学習センター（編集：社会教育アドバイザー）

特集

令和2年度(第70回)秋田県自作視聴覚教材交流発表会

令和3年2月20日(土) 秋田県生涯学習センター

本交流発表会は、学習の場で役立つ視聴覚教材の自作活動促進のため毎年開催されています。70回目となる今回は、3部門14作品(小学校4、中学校7、社会教育3)のエントリーで、特に大学生からの応募が多数ありました。作品発表では、学校の授業場面におけるICT活用や郷土、地域の伝統文化の継承などに関わる内容の自作教材が多くみられました。審査の結果は、次のとおりです。

最優秀賞

(2021年度全国自作視聴覚教材コンクールへ推薦)

『『天気とその変化』の学習をわかりやすく』

秋田大学教育文化学部2年生 佐々木 優花



優秀賞

『きつね結びはなぜ出来る』

神岡小学校学校支援地域本部 鈴木 三郎

『ジオサイト案内書4 高松(三途川・川原毛)/高松』

メディアバンクみるわーく 畠山 仁



【発表会場の様子】

優良賞

『流れる水のはたらき 阿武隈川』

秋田大学教育文化学部2年生 志賀 月海

『防災を考えよう』

秋田大学教育文化学部2年生 菅原 瑞生

『メラミン粒子を用いて水の働きを追求しよう』

秋田大学教育文化学部2年生 斎藤 大也

『雪の結晶のヒミツ』

秋田大学教育文化学部2年生 佐藤 蒼汰郎

『プリズムを用いた単色光の屈折の観察』

秋田大学教育文化学部2年生 三浦 慧斗

『様々な結晶』

秋田大学教育文化学部2年生 近藤 澄麗

『水蒸気の変化』

秋田大学教育文化学部4年生 戸田 健太

『『オームの法則』の学習を支援するボードゲーム』

秋田大学教育文化学部3年生 富塚 和真

『軟体動物と節足動物』

秋田大学教育文化学部2年生 飯田 匠

『若畑のニンギョウサマ』

メディアバンクみるわーく 小野 まさる

『哲学カフェ「これからのふるさとの話をしよう」』

横手市朝倉公民館 梁瀬 亮朋

出品作品は、当センターにて視聴、貸し出しが
 できますのでご活用ください。



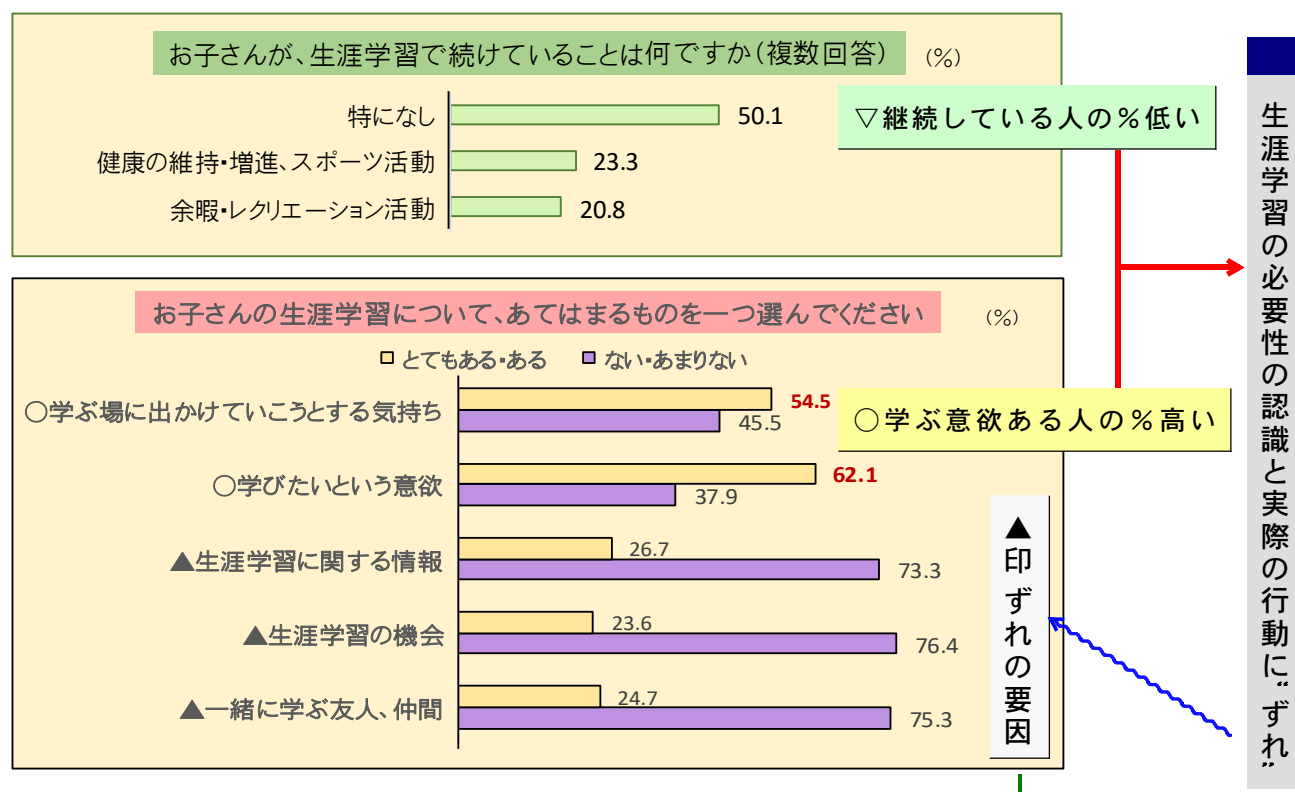
「障害者の生涯学習」に関するニーズ調査 ～特別支援学校生徒の保護者アンケート結果による一考察～

秋田県生涯学習センターでは、現代的課題や地域が抱える課題の解決に向けた中・長期的な視野に立った調査研究事業を実施しています。

今年度の調査研究は、令和元年度に県内すべての特別支援学校高等部在籍生徒及び卒業生の保護者を対象に実施した「障害者の生涯学習」に関するニーズ調査の結果分析に加え、「障害者の生涯学習」を実践している団体等への聞き取りを実施するなどして検証、考察を継続しました。

このたび、調査研究報告書がまとまりましたが、紙面の都合上、考察の一部のみを模式的に表して紹介します。なお、報告書の全容は、3月中旬当センターのwebサイトに掲載する予定です。

ニーズ調査から見てきた本県の特徴



【聞き取り調査】 ・ 必要な情報を得る方法が限られ、障害者の元に届いていない現状が浮き彫り
・ 予算や人的な支援の不足により、学ぶ場やプログラムの充実が困難

今後、必要とされる取組

全県域の関係情報を一元的に提供できるシステムの構築、そのための自治体、関係機関、学校等間の連携が喫緊の課題

- 特別支援学校と卒業後の生活の場となる地域(事業所、公的機関等)との連携
- 障害のある方、ない方の枠を越えたネットワークの構築

共生社会の実現には包摂的な生涯学習の展開が不可欠

〈アドバイザー雑感〉

障害者が生涯にわたり自らの可能性を追求できる環境を整え、地域の一員として豊かな人生を送るための「特別支援教育の生涯学習化」の重要性に改めて気付かされました。また、障害者の生涯学習が、これからの時代における新しい学びの循環に立ち遅れることのないよう真摯に向き合っていく大切さも痛感しました。今まさに人と人の関係性を構築する「社会教育」の英知が求められています。



「志」を掲げる山王中

秋田市の官庁街に建つ山王中学校は、今年68年目を迎える伝統校です。創立以来、先生たちの先進的な授業研究や子どもたちの文化・スポーツ等での活躍は、県内外の多くの人の知るところですが、実は、地域密着型の活動や震災被災地交流などをおして、社会のため、人のために役立つ人間になろうとする「志プロジェクト」の取組を地道に重ねている学校でもあります。

例えば、地域貢献活動としては、学区内の地域清掃等を行う「環境防衛隊」の活動、隣接する幼稚園での読み聞かせや合同避難訓練等の交流、郷土芸能クラブの秋田市竿燈まつりへの参加等々、多彩な活動を展開しています。

中でも特筆すべきは、吹奏楽部によるボランティア活動です。東日本大震災後に吹奏楽部が先んじて行った岩手県の被災地との交流は、地元中学校との合同演奏会や生徒会交流、竿燈の実演披露など、被災地の方々とのふれあい交流として現在も続いています。さらに、校内でも毎年3月11日には、大震災の教訓が風化しないように「全校黙祷」を継続しています。また、秋田刑務所の更生支援としての演奏会も行っており、今年度は、仙台矯正管区長表彰を受けました。

吹奏楽部は、「心から心へ」の部訓の下、「自らの心を高め、その想いを今できる最高の演奏によって多くの人に伝えること」を目標に今日も活動しています。

吹奏楽部と校長先生に ちょっとインタビュー

部長 齊藤花音 さん 「あなたにとっての吹奏楽とは？」

「大切な宝物であり、私の人生を変えてくれたもの」

顧問 飯嶋宏紀 先生 「生徒には将来どんな人になってほしい？」

「困難に立ち向かい、乗り越えることに喜びを感じられる人」

加賀谷亨 校長先生 「山王中とは？」

「『いかに生きるか』の問いに真剣に向き合い続ける子どもたちの学校」



竿燈ふれあいタイム



幼稚園児と避難訓練



被災地交流(岩手県)

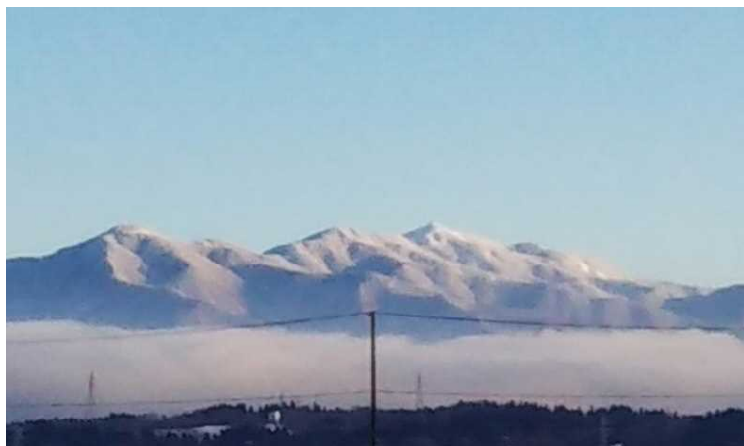


音楽室での練習の様子



2021 新年スナップ

初山河大鷲になり風を切る 桜田文山



2021.1.7 青空と 雲海と 太平山と

ドカ雪に埋もれる街と這う車 佐藤とくし



2021.1.9 “ドカ雪”の秋田市住宅街



トピックス

ボランティアコーディネーター「のぞみ」公開学習講座

知恵の輪講座Ⅴ 暮らしの教室

生涯学習ボランティアコーディネーター「のぞみ」は、秋田県生涯学習ボランティアセンター(当センター内)を主な活動場所として、毎月1回の定例会、当センター相談窓口での受付、講座の開催、研修・視察、学習会、当センター事業への協力などを行っています。

毎年好評の公開学習講座は、今年度、1月24日当センターで「シニアが楽しく生き生き暮らすために」をテーマに開催されました。当日は、加藤洋子代表の挨拶に続き、秋田ケーブルテレビの西村修氏による講話がありました。(講話内容については、紙面の都合上概略のみ紹介します。)

講話



「お金の仕組みなどの生活情報に対応し、
前向きに生きられる術を学びませんか」

秋田ケーブルテレビ記者
ALL-Aシニアアドバイザー

西村 修 氏



- コロナに負けるな 新しいシニアライフ
- 令和元年 高齢白書 ポイント
- 増えるデジタルシニア
- キャッシュレス時代へ
- エイジフレンドリーから「エイジング」フレンドリーへ
- ALL-Aの紹介～ シニアだから 生き生き暮らせる

七色

筑波大学には、講道館柔道創始者で元東京高等師範学校長嘉納治五郎による「一世化育」の書があります。学校、社会を問わず、教育の不易流行に深く関わる者にとっては、その根本にある真理や使命感の大切さに改めて気付かせられる言葉です。

教育之事天下莫偉焉
一人徳教広加万人
一世化育遠及百世

教育のこと天下これより偉なるはなし
一人の徳教広く万人に加わり
一世の化育遠く百世に及べり

「世の中に教育ほど尊いものはない。一人の優れた教えが広く万人を感化し、一生かけた優れた教えは百代後の世までも及んでいく」の意は、まさに「教育は人なり」そのもので、教育に携わる者の真を問うものです◆当センターが昨年度実施した市町村教育委員会訪問時の復命書には、訪問職員から市町村への助言が次のように記載されていました。「社会教育は、目に見えないものを創っていく上でひな型がありそうでないのも特徴。社会教育は、どこからも制約を受けない。アレンジもできるし、逆に何もなくて済むこともある」。その意図するところは、聞き手側個々の解釈に委ねられることとなりますが、七色子なりに「だからこそ、そこに関わる人の真が問われる」と意識しました◆激しく変化する社会への対応が求められる昨今、確かに、社会教育関係職員の仕事にひな型はないのかも知れません。しかし、多様さ、異質さ、不確実さなどに寛容さが増す時流だからこそ、単なる思い付きではなく、事実を丹念に分析し、根拠に基づいて実証的に結論を導き出すという“本質を見抜くプロセス”は軽視できません。専門性を支える共通認識(common sense)は明確であるべきですし、これこそが地域社会の教育活動に深く関わる専門職たる者の矜持といえます◆教育は、人が人を育て、育った人によってまた人を育てる不易流行の営みです。昭和、平成、令和の時代を駆け抜けてきた教育にあっては、「不易を知らざれば基立ちがたく、流行を知らざれば風新たならず」の古くて新しいベクトルが必要不可欠です。次代の継承者が育つ持続可能な“人づくり”は、まさにその根本にある「一世化育」の自覚と覚悟をもって臨む大業と確信します。